



Salamander
in
the
Circle

第二十五章

イリチャの行方

峯村 明

Salamander in the circle

第二十五章の登場人物

イリチャ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
テクトリ	……	ミクトランの女主
プラトニオ博士	……	メッサナを追放された化学者
ベネトナシュ	……	死神

これまでの主な登場人物

		世界の果ての島			
ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父	
	ティコ	科学者	オマキ	ホシナの妻	
	ナシル	本部・事務職員	キト・コマ	ホシナ族の男たち	
	ヤスウ	学術調査団の団員	ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)	
	ターヴェ	学術調査団の団長	サノヒコ	王に仕える役人	
	ヒューダー	学術調査団の団員	フツヌシ	王に仕える者 将軍	
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長	
	ヴァリス将軍	レルの父	チドリ	アマセオの妻	
	カール	王子 ヘルガの弟	ハマツ	チドリの養父	
	ロウナス	国務省の高官	タマシギ	ハマツの妻子	
	アンテロ	レルの副官	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	
	摂政	亡国王の弟	コタエ	"	
	ヘルガ	王女	スクナ	"	
ケストル王国	パウル	国王	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
	ウルリク	第三王子			
	ヘンリク	ウルリクの息子			
	ホベオクー	ケストル人の美女			
	ソルド	闘技場の警備隊長			
黄金門市	皇帝	皇帝	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	バイスロイ	皇帝の息子		バラム&バランケ	双子のジャガー バンテオラの部下
	パソネル	バイスロイの参謀		メルノ	音楽家
冥界	冥界王	冥界の王		バルダリス	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理
				メンドルブ	メッサナ化学者集団の代表
				コモラ	前総督の顧問 最高賢者

目次

イリチヤの行方

392.

393.

394.

395.

396.

397.

398.

399.

400.

401.

402.

403.

第二十五章のあとがき

back number

奥付

イリチャの行方

392.

——目線を感じる。

誰かが見てる。まじまじと。上から下から。右から左から。ためつすがめつ。手に取った置物の値打ちを探るような、ただしあんまり信用していない、ほとんど疑っている、でも、興味は大あり。疑いと面白半分と、好意のカケラも感じられない。そんなまなざしで。

そんなに興味を持たれる覚えはない。ぼくが何をしたっていうんだ？ そりゃあ、ターコイズの仮面の化け物たちを大量にぶっ壊してやったけど。

ぼくの手を勝手に握ってめそめそ泣いていたベネトナシュはどこへ行った？ やつの異様に冷たい手の感触がまだ残っている。そうだ、この目線はベネトナシュのじゃない。似ているけど違う。なんていうか、もっとねちっこくて、もっと冷たくて、もっと、いやらしい。ベネトナシュを百人束にしたようないやらしさだ。筋金入りの、次元の違ういやらしさ。その底の方に笑いの波動を感じる。楽しい笑いじゃあない。好意でなく悪意を、あざけりとからかいを感じて、ぼくはどっと頭に血がのぼり、度を失いかけた。ぎゅうっとこぶしを握ったとき、はたと思い出した。指輪！ 指輪を取り返さなくちゃ！

あの指輪はただの指輪じゃない。ゴンやヒューダーの想いを受け、神聖なあまりマミ

ヤが受け取りを拒んだ黒曜石の短剣と同じ価値があるのだ。だから誰にも渡すわけにいかない。指輪をくわえていったコウモリがもし飲みこんでしまったとしたら、捕まえて引き裂いてでも取り返すんだ。

そう心に決めると、体のなかに火が熾ったようだった。もしかしたらぼくは今初めて、自ら意志を定めて道を進もうとしたのかもしれない。

393.

(ふうん?)、とそいつは目をきらめかせた。ぼくが冷静さをとりもどしたことを面白がっている。くすくす、くすくす、と笑いの波動がくる。気持ちが悪いけど、そんなことはどうでもいいや。ぼくには重大な目的があるんだから。

「おまえ、名はなんとおいいだい？」

じつとりと湿った、生暖かい、風のような、太い声。女だ。女だったのか！ ぼくは落ち着いて言い返した。

「見ず知らずのひとに名乗る名は持っていない」

「っはっはっはっはっは」

豪快な哄笑をひとしきり響かせておいてからそいつは言った。

「いい度胸だねえ、おまえのようなこどもがこのあたしに言い返すとは。世間ではそういうのを、身の程知らず、というのだよ。ああ、学ぶ機会がなかったのかい？ それとも、まともな教師がいなかったのかい？ 親は何をしていたのさ？」

いちいちむかつくけど、はしからうっちゃることにする。「ぼくはコウモリを探して

いる」

「……コウモリだって？」

「小さいやつだ。ぼくの手で噛みついて、指輪を持って行ってしまったんだ。返してほしい」

「それはまた！ まぬけなことだね。小さいコウモリなんてここらにはいっぱいいるよ。でもひょっとしたら……この子のことかしらね」

暗闇のなかにひとすじの光が上から降りてきて、そのなかにコウモリがぱたぱたと羽ばたいていた。そしてそいつの口には――

「それだ！！」ぼくは思わず大声をあげた。すると、コウモリはびくっと飛び上がり、くわえていた指輪をごくっと――

あっという間もなく、光に鈍く輝いていた指輪はコウモリの口の奥へと消えてしまった。

「あーあー、おまえが脅かすもんだから。おまえのせいだよ、あきらめな。ま、この子を引き裂くか、しぜんに出てくるのを待つか。どっちにしろ、汚物のなかから選り分けるしかあるまいよ。っはっはっは」

コウモリを照らしていた光はにわかには大きく拡がり、なよやかな白い腕があらわれ、指輪を飲みこんだコウモリを引き寄せ、豊満な胸にかき抱いた。太い黒々とした眉、濃いまつ毛に縁どられた目には強膜がなく、右目は緑に、左目は赤い色にきらめいている。異様に、美しい女だ。

「あたしはテクトリ。ミクトランの女王さ。この子が欲しかったらどこからでもかかっておいで。イリチャちゃん」

394.

さて、ベネトナシュは……

「ひどい……」めそめそと泣いていた。

うまいことイリチャをかどわかし、にんまりとほくそ笑み、あれやこれや楽しもうとうれし泣きしていたところへ、テクトリがやってきた。

「あんたはこんな穴倉でなにをやってるのさ」

「穴倉って、おばさん、おばさんちの一室じゃありませんか」

「そういうことじゃなくて。あんたは地上で起きた大事件を知らないとみえるね」

「はあ、地上には当分でてくるなど言われてますしね。なにかあったんですか」

「ネウトラ・ポリスが消えて無くなった」

「はあ……」

「なんだい、その腑抜けた反応は。あのね、ネウトラ・ポリスで何かが爆発したんだよ。ばかでかいキノコみたいな雲が立ち上がって、それからしばらくして雨が降り出した。真っ黒な雨だったらしい」

「へえ」

「どこまでも腑抜けてるね、ベネトナシュよ、それからどうなったと思う？ よおくお聞き。あんたの大事な巨人族どもがばたばたと倒れだしたんだ」

「な、ななっ！ 私の、わが子のように大事な巨人族たちが！？ やられたというのですか！？ 愛する巨人たちが！？」

「爆発と関係があるのかどうか、それはわからないけどね、つぎつぎと倒れてるのは確かだよ。あんたほんとに知らなかったの？」

「知りませんでしたよ、なにしろあれやこれや忙しくて！」

「ああ、地上から紛れ込んできた連中のひとりだね、あんなの捕まえてどうするのさ、巨人族に食わせてやったほうがましというものじゃないか、いったいなにを企んで……んん？」

興味もなさそうにちらりと投げたテクトリの目の色が、変わった。

せっかく手に入れたイリチャを、こうしてテクトリに取り上げられ、地上で頓死した巨人族の様子見に放り出され、いろいろな意味でベネトナシュは、「ひどい……ひどすぎる……」、とめそめそと泣いていたのである。

395.

テクトリは掌中でコウモリを可愛がりながら、蒼ざめるイリチャを睨むようにじろじろと見た。それから唇をすいっと吊り上げ、言った。

「ま、飲みこんじまったものはしょうがないだろ。あたしだって可愛いこのコの腹を裂くようなマネはしたくない。自然に出てくるまで気長に待とうじゃないか。そしたら、持っていくがいい」

「……返してくれるのか？」

「もちろんだとも。大事なものなんだから？」

イリチャがこっくりとうなずくと、妖艶な美女はにっこりと笑った。これほど額面通りに受け取れない笑顔もなかった。なにしろ、寒気を覚えるのだから。

「よし、話は決まりだね。ついといで」

懸命に気を張っているイリチャだったが、相手は海千山千の悪意の塊だということを感じ取る。最前の決意もどこまでもつか、あやしくなってきた。

イモリだった時の彼には天敵というものがいなかった。野に住む蛇も鳥もこの小動物の皮膚には毒があると知っているのだから、食ってやろうとは思わないわけだ。翼竜と化した際、首長竜に噛みつかれたがあれは好奇心から出た、ただの不注意というものである。ターコイズの仮面の化け物も気味が悪いだけで敵というほどではなかった。しかしこの女は――

彼は生まれて初めて身の危険を感じていた。

「せっかくこんなとこまで来たんだ、あちこち見せたげるよ。どこがいい？」

思いがけない展開にイリチャはしばし呆然とした。女王自ら領土を案内してくれるというのだ。ダーヴェとヒューダーが探索に探索を重ね、いまだに全貌がつかめないミクトランの地を！ 彼は喉を鳴らして唾を飲みこむ。これを拒む理由はない。

「見たいところがあるんだ。望めば見せてくれるのか！？」

「いいともさ。あたしはこの主、できないことはないのだよ。さ、遠慮はいらない。」

言っごらん」

「巨人が生まれる場所があると聞いたことがある――」

「なあんだ。あんなところがいいのかい？」

彼女は豪華に垂れ下がった艶やかな衣装の袖をばさりと無造作に打ち振った。

396.

「これはこれは！ 女王陛下！ ご機嫌うるわしゅう！！」

テクトリを出迎えたのは意外なことに、地上でよく見かけるような、少々気難し気な老人だった。

体つきはがっしりと逞しいが老人に違いなく、はげあがった額、てっぺんから後頭部、側頭部へ、ふさふさとした白髪が腰まで伸びている。態度はどことなく卑屈だが白い眉毛に半分かくれた目はどことなく知的だ。メッサナのメンドロブ氏が着ていたような白い寛衣を身につけている。肌の色は浅黒い。ずっと後世の者が見れば、古代ギリシアの学者のごとき風貌なのだが……。全身に徳性や知性ではなく、えもいわれぬいかがわしさをまとっている。

彼は女王の美しい手を両手でうやうやしくおし戴いた。

「ごきげんよう。プラトニオ。おまえのかわいい巨人たちは元気かい？」

「は。彼らは今日も元気いっぱいでございます。ささ、ごらんくださいませ」

プラトニオという白髪の老人は腰を低くして女王をいざなう。女王の膨大な量の布地

を使ったロングスカートの陰に居たイリチャに気づき、おや？ という顔をし、卑屈なまなざしで女王の顔をうかがった。女王は気にも留めなかったが。

イリチャはきょろきょろとあたりの様子をうかがわずにいられなかった。ここはどこだろう？ あたりの様子が先刻と一変してしまったのだ。瞬間移動したのだろうが、自分が今どこにいるのかさっぱりわからなくなってしまった。それでもここがどこなのか特定できる手がかりがないものか、目で探り続けた。

そうしながら、思う。テクトリと相対した場所もそうだったが、それまでヒューダーらと探検した場所とは雰囲気というか、肌を感じる空気がちがうのだ。ダーヴェは転送システムがあるのはミクトランの最下層で、その上にさらに層があると言っていたが、それとも違う気がする。次元が違うと言った方がいいかもしれない……

それに……このプラトニオという老人は……

老人はなにか操作するでもなく、『扉』を開けた。いや、扉というより壁が上下左右に開いていき、その向こうに空間が……

空間の下に地面や床はなく、さらにその下へと続いている。巨大なすり鉢状の構造物を見下ろしているのだった。

397.

それはいったい、どれくらいの深さがあるのか。

巨人族といえばダイドラボッチしか見たことがないイリチャだったが、そこにいる彼らの身の丈は五メートル以上はありそうに見えた。その彼らが両手をあげて伸ばそう

が、思いきり飛び上がろうが、すり鉢のふちにはとうてい届きそうもない。すり鉢にはそれだけの余裕があった。その底ときたら文字通り奈落の底だ。生身の肉体を持つ者がのぞき込んだら恐怖で膝が砕けるだろうという深さだった。

メッサナにあったような亜熱帯の植物が茂るすり鉢の中を巨人たちが幾人か、歩きまわっている。彼らにとっては、そそり立つ山々の裾の、のどかな谷を歩いている感覚だろうか。ミクトランの中にこんなものがあるとは。やはり異次元の中に隠されていたとしか言いようがない。

ふと、鳴き声が聞こえた。羊だ。めえええ……めえええ……と。牧場でもあるのだろうかというのどかさ。と、ひとりの巨人が駆けだすのが見えた。すり鉢は深さも相当なものだが広さも相当なものだ。直径は数百メートルはあるだろう。もしかしたら数キロかもしれない。基準になりそうなものがないのでまるで見当がつかない。

巨人は鳴いている羊めがけて、およそ百メートルを一瞬で突っ切った。彼らにしてみれば豆粒のような羊に対して、寒気を覚えるような執念といえた。最後の十メートルはひと飛びである。そして――

嗅覚、聴覚、瞬発力、跳躍力、膂力。執念。

あらゆる点において、巨人は恐るべきハンターだった。そしておそらく知能もある。羊を仕留めた巨人は、あとから駆けつけた別の巨人に対して口を拭いながら何か言い、退けたのである。見た目から彼らを単に原始的な人類とするのは間違っているとイリチヤは思った。彼らは現生人類以上の能力を持っているのだから。

地上世界が巨人族によって征服されるかもしれないと容易に想像できる。胸がわるくなるという以上に、衝撃的な光景だった。

「おや？ なんだか顔色がわるいよ」

「もともとこんな顔色だよ」

「そうかい？　じゃあ、こんなのを見ても平気だよねえ」

ぱちり、と女王の指が鳴った。すると眼前のすり鉢のふちの手前、床の中からせりあがって来たのは半透明の壁。それはどンドンせり上がり、目の高さをはるか越えたところで止まった。壁と言っても奥行きが一メートルはある。その中には――

イリチャは後ずさった。あやうく悲鳴をあげるところだった。半透明の厚い壁はおそらく水槽のようなもので、様々なモノが浮遊していた。腕、脚、胴体、骨、内臓、腱、神経らしい細い筋、血管、眼球、体毛……………どれも人間のものとは思えないサイズ。

悲鳴は飲みこんだが胃のひきつりは止められない。反射的に口を押えたがこらえきれずにその場に座りこみ、こみあげてきた苦い液体を吐いてしまう。

398.

「おやおや」

テクトリはおもしろそうにイリチャを見おろしている。

「口ほどにもない坊やだこと。まあ、あたしだってこんなものを愛でる趣味はないけどね。けどね、これはただのがらくたじゃない。世界中から集めた巨人のがらくたさ。これだけあれば巨人はいくらでも作れる。そうだろ？　プラトニオ？」

「は。これらの検体から遺伝子を取り出し、培養いたします。それからいくつか複雑な

工程を経まして、巨人ができあがるわけでございます。それこそ、いくらでも」

「メッサナのやり方はもっとスマートなはずなんだが」笑みを浮かべた顔でテクトリは言う。「お偉い師匠から破門された身分じゃあ、そんなもんだろ。しかし上出来さね、生命を思いのままにできるんだからさ」

プラトニオが大きな体を折り曲げて頭をさげ、「女王陛下のお役に立てまして光栄でございます」、とおもねるのへ、

「なに、あたしの役というより、ベネトナシュのお遊びさ。アレの趣味のわるさはこのあたしでさえおそれいるってもんだ。それも馬鹿馬鹿しいほど悪趣味ときてる」

そこでテクトリは大きな口を開けて楽しそうに笑う。

「ああそうだ、プラトニオ、今日は特別に用があって来たんだった」

「と、仰せられますと？」

「地上へ放した巨人どもがばたばたと死んでる」

「な、なんですと！？」

「ついこないだ」ネウトラ・ポリスでの大爆発、巨大なキノコ雲、真っ黒な雨……ベネトナシュに聞かせたのと同じ話をテクトリは繰り返した。血の気の引いた灰色の顔でプラトニオは口をばくばくさせている。

「そ、その大爆発はもしや——」

「心当たりがあるのかい？」

「ひ、ひじょうに危険な、やってはいけない、メッサナで封印されていたほどの、ば、

ばかな、このわたくしでさえ」驚きのせいなのかなんなのか、文章になっていない。

「メッサナで？ 封印されてた？ じゃあ、地上の人間にとっても危ないってことなのかね」

「さ、さすがは女王陛下、まさにその通りでございます」

「そりゃ、まずいね」

テクトリの口から出たのは意外な言葉だった。地上の人間に害があるものは、まずい、というのだ。床に這いつくばってえずいていたイリチャは思わず聞き耳を立てた。いったいなにがまずいというのだろう。

「巨人族はベネトナシュのお遊びだから、どうでもいいんだよ。けど、地上の人間はどうでもよくない。だって、冥界王さまの——」

テクトリの真剣な口調がふと止んだ。なにかの気配に振り返った目が、大きく見開かれている。

「め——」

ミクトランの薄墨色の背景に溶け込んでいるような黒衣の、長身の男。純白の長髪、濃い赤い色の目の光は鋭く、肌の色はやや青ざめてはいるがその張り艶は青年のものだ。全身をすっぽりと漆黒のマントが覆っている。

あのテクトリがあきらかにたじろいでいるのがわかって、イリチャはふいにこの男に興味を湧いた。

「ベネトナシュはどうした」

男は唇をほとんど動かさずにそう尋ねた。殷々とどろくような声音だ。尋ねながらその目は床でうずくまっているイリチャを見ている。

「ミクトランを出てはならぬと、申し渡したはずだが？」

「は、はい、べ、ベネトナシュにつきましては仰せの通りでございましたのですが、地上に放出した巨人族に異変が起こりまして、その調査に向かったのでございます」

テクトリは言葉につかえながら、しどろもどろになりつつ、返答する。プラトニオはその様子をおっけに取られて盗みみしていた。

男の目が不穏に底光りする。

「巨人族を地上へ放出？ だれがそのようなことを許可したのか？」

「は……あたくしは一向に……。すべてベネトナシュめが行ったことではございまして」

「ではこの場をなんと説明する？」

巨人族放出どころか巨人族製造の現場に踏み込まれてしまったのだ。男の口ぶりテクトリの慄きようから、これはれっきとした現行犯だった。

そして、さらにその場に。

「おばさん！ たいへんだよ、おばさん、おばさんが言った通り、そこいらじゅうで巨人族どもがばたばたと——！！」

泡をくったベネトナシュが大声で現況を細かく描写しながら駆けこんできたのだった。

400.

ベネトナシュは佇む男が初め目に入らないようだった。しかしテクトリの異様な目つきと必死の目配せに気づいたときはもはや……

「え？ あの？ まさか？ め、めめめめめめ」

「元気そうだな。ベネトナシュ。地上の空気はどうだった？」

「あ、あの、それが、なんだか、じゃりじゃりねばねばしてまして」

「そなたには余の言葉はなんの意味もないと見える」

「えーそんなことは——」

「そんなことはないと？ では何故余の厳命を無視して、地上へ出向いた。何故余が知

らぬところで太古の巨人が地上を跋扈しているのだ。転送システムがほぼすべて制御不能に陥っている。巨人族のような大質量を短時間のうちに移動させたせいではないのか。

テクトリ、その方にも訊こう。何故巨人を造り、育てている。余はそのような技術をその方に下した憶えはないのだが」

男の口調はきわめて静かだったが、力があつた。あのテクトリやベネトナシュが反論どころか、ひとことも返答できないのだ。男の圧倒的な迫力ゆえに。

「プラトニオ。メッサナを追放された者よ」

老人はびくっと体を震わせた。

「生命を作り出すワザを操ることは、この余が赦さぬ。この工房は即刻、閉鎖する」

「そ、そんな殺生な！ ここには数百体の巨人が暮らし、数千体が生まれかかっているんですよ——」

「殺生とはなんの冗談だ。闇から生まれたものは闇に還すがよい。その方にならできるであろう。できぬとは言わせぬ」

膝から崩れ落ちたプラトニオには目もくれず、その目は縮み上がっているテクトリとベネトナシュへと向けられる。

「余の命をことごとく軽んじるその方ら。覚悟があつてのことであろうな」

男は言った。「ミクトランを冥界から切り離す」、と。

それがなにを意味するのかイリチャにはわからなかったが、彼女らの表情をみれば極刑のようなものと想像できた。

しかし——ミクトランが切り離される——？

「待って！！」イリチャは渾身の力ではね起きた。「それは困る！！ ぼくの仲間がいるんだ！！」

401.

男の目がイリチャをじっと見据える。闇に燃える熾火のような赤い色の目。

「そなたらはこんなところで何をしている」

「巨人族を探していた。地上を荒らしまわってる巨人族がどこから来るのか探して、とうとうミクトランへたどり着いた」

この男が何者であるにせよ、こうなったら何もかもぶちまけてやれとイリチャは思った。

「巨人族は体も力も巨大過ぎてとても人間にはかなわない。その上やつらは人間を食糧にする。たくさんの土地が踏み荒らされ、村や都市、国が壊された。逃げ場もない、そんな恐怖の中で生きていけるものか！ だからその根源をみつけ、根絶しようとぼくらはミクトランへたどり着いたんだ。そしたら——あなたは巨人族の根源を絶とうとい

う。そういうことだよね！？ でもぼくの仲間はまだミクトランの中を探し回ってる。ミクトランは広すぎて、当てもないのに、手探りしてる。ぼくもいきなりそこのおばさんのところへ連れてこられて、仲間と連絡がとれないんだ。だから仲間に、巨人族の根源はなくなる、ってことを教えてやらなくちゃ。それから——」

逆るようにしゃべってからようやく息をつく。

「ここから出してほしい。ぼくと、あと、三人の仲間たちを！ それと、二頭のジャガー！」

しばらくして、「話はわかった」、と男は言った。「そなたらをここから出すくらい簡単なことだが……どこへ行こうというのだ。ネウトラ・ポリスも黄金門市もすでにないというのに」

(え?)

黄金門市が壊されてしまったことは聞いている。ネウトラ・ポリスも。が、破壊者巨人族は次々と死に絶えていると先刻言っていた。ならば危険は去ったということではないのか？

「どうやら知らないようだが、アトランティス大陸全体に今、放射能雨が降っている。地上の巨人族が倒れ始めたのはそのせいだ。放射能雨とは巨人族だけでなく、大気も土地も生物も、あらゆるものを汚染する。この先数千年、大陸は人間が住める場所ではなくなった」

「どうして——そんなことに——」

「評議会の人間が巨人族を滅ぼそうと特殊な爆弾を造った」

男はイリチャの問いに応じた。質問に応じる。それはベネトナシュやテクトリにとっ

てめったにお目にかかれない驚愕の光景だった。

「爆弾は巨人族だけでなく、あらゆるものを道連れにした」

402.

評議会が……巨人族を滅ぼそうとして……あらゆるものを道連れに……ハウシャノウ
ウ……

男の声が頭の中でぐるぐると廻っている。評議会が……巨人族という禍根が……絶た
れても……地上が汚染……

「愚かしいことだ。人間というものは」

愚かしくなんかない！！

想念だけがある。けれど言葉として出てこない。愚かな人間はいたかもしれない。け
れどダーヴェェが、ヒューダーが、バイスロイが、ヘルガが、愚かだったとは到底思えな
い。愚かでない人間だって大勢いたんだ。けれど……けれど……なにもかも、無駄だっ
た……

手足の先から力が抜け出て行く。眼の前が、意識が暗くなっていく。暗闇が周囲に立
ち込め、熾火のような赤い冷たい火がふたつ、ゆらゆらと燃えている。

イリチャを哀れむように男は言った。

「放射能雨は限定的なものだ。地上のすべてが汚染されたわけではない。メッサナのようになんの影響も受けない場所もある。そう悲観することはない」

しかし衝撃のあまり安心してしまったイリチャにその言葉は届かなかった。光を失った目はどこも見えていなかった。

「地上のどこへでも送ってやれるが。メッサナでよかろう？」

それはダーヴェたち一行に向けられていた。男はこの一幕を一行に見せていたのである。

403.

とつぜん現れた男の一声で、巨人族が住むすり鉢のような谷も水槽もプラトニオ博士も、闇の中へと消えた。まるでばっさりと幕を切って下ろすような唐突さだった。あとには縮こまったカラスとミミズクと、イリチャだけが残った。そのミミズクがおずおずと前に進み出る。態度はおずおずとしていたが赤と緑の目には陰にこもった光があった。彼女は起死回生のチャンスを狙っていた。

上目遣いに男を見上げて言った。「ひとつだけ、冥界王さま、そのイリチャという子はもしや……」

男は静かにミミズクを一瞥。そしてものもいわずミミズクに向かって手を差し出した。一瞬、ミミズクは喜悦に震えあがった。男の気が替わったと思ったのだ。しかし、

男が所望したのは、ミミズクの懐にかくまわれた小さなコウモリだった。

引きずり出されるようにして宙に浮いたコウモリは、むなしくぱたぱたと羽ばたいた。男が指を一本、くい、と曲げるとコウモリの中から輝くものが現れた。闇の中に清らかな光を放つそれはコウモリを離れて宙を移動し、自失しているイリチャの手の中に落ちた。ミミズクはぼかんと嘴を半開きにしてその様子を眺めていた。

「余の目はなにもものも見逃さぬ。かつて余はそう言ったはず」

ただただ平伏するカラスである。彼の一大プロジェクトであった巨人族再生計画は文字通りあっという間に潰えた。彼のしてきたことで冥界王の気にいったことは一度もなかったし、そのたび怒らせてきた。にもかかわらず、ご主人様の怒りをいちいち真に受けてこなかった報いがついに最悪の形でやってきた。そのショックが彼を呆けさせてしまった。

「かつて、偉大な種族が偉大な仕組みを構築した。テクトリにはその守護を命じたはずだったが。それをこうも完膚なきまでに破壊し尽くすとは。人選を誤った余の不明のいたすところとはいえ——もはや取り返しがつかぬ。その方ら二名、うぬらが破壊した出口のないシステムと、運命を共にするがいい」

男は長い脚を畳むようにして膝をつき、自失しているイリチャを肩にかついだ。乾いた足音が薄闇を遠ざかっていく。そして、ぱたん、と扉が閉まる音がした。

第二十五章 『イリチャの行方』

第二十六章へ続く

第二十五章のあとがき

なぜかあとがきから描きはじめている今日このごろ…激アツの夏が終わって、さぞかし創作に力が入るかと思いきや。気になることがあって資料をひっくり返したところ、泥沼にはまってしまいました。まあ、資料というのは手を付けるとキリがなくて、こっちにのめりこんでしまうと創作意欲がさがってしまうという泥沼ですね。

で、なにが気になったのかといいますと、Salamander in…の二万年前という時代、ユーラシア大陸はどうなっていたのかということです。

資料は[こちら](#)にざっとまとめてありますが、まとめる過程で出来上がったのが『宇宙船七月号』という話です。まあ、副産物です。この話、登場人物から始まりまして、名前はこう、関係はこう、という具合に夢の中に現れた。寝ながら組み立てた話なのでした。

Salamander in…とは全然関係ない、人種も、世界も違う。けれど、【七月号】のC. グラヴァシュの祖先がシベリアで生きていたころと、Salamander in…の舞台になっている時期とはほぼ、（ほぼ、です）同時期ということになります。古い文明の終わり、と新しい文明の黎明期、二つの文明が同時に存在し、今は新しかった方の文明の終末期なのかなど。

さて。イリチャを連れ去ったのは何者か。彼の運命はいかに。第二十章から続いた第五部はここまで。

末筆ながらいつも御覧いただき、ありがとうございます。応援ツールを設置してみました。使っていただけたらうれしいです。

（↑ 一時設置したのですがうまく表示されなくなってしまい、筆者力不足のため復旧諦めました。使ってくださった皆様にお礼とお詫びを申し上げます。 2024年3月27日）

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチヤ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジャクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが

……

一方、ヒューダーはイリチャを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチャとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチャが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半。レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだ。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチャとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチャは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、

メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。ヒューダーの要請に応じるイリチャの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。

シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。

ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンはヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起これ、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門市の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらした人間、ヒューダーをも恨んでいた。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見ただけからメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理バルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていたどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

奥付

Salamander in the circle

第二十五章 イリチャの行方

2023年11月1日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
